

Title	優生学：その定義,展望,目的
Sub Title	Francis Galton, eugenics: its definition scope and aims
Author	ゴルトン, フランシス(Kitanaka, Junko) 北中, 淳子(Minayoshi, Junpei) 皆吉, 淳平
Publisher	三田哲學會
Publication year	2005
Jtitle	哲學 No.114 (2005. 3) ,p.181- 188
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特集都市・公共・身体の歴史社会学-都市社会学誕生100年記念- A編 ゲデス・プロジェクト 第III部 ロンドン社会学会の創立
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000114-0185

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

Francis GALTON, 1905, "Eugenics: Its Definition, Scope and Aims,"
Sociological Papers 1904 (1905): 45-50.

Also in *The American Journal of Sociology*, Vol. 10, No. 1(July, 1904): 1-6.

Also in his *Essays in Eugenics*, The Eugenics Education Society, 1909:
35-43.

1904年5月16日、スクール・オブ・エコノミクス・アンド・ポ
リティカル・サイエンス（ロンドン大学）で開催された社会学会で報
告された。

司会：カール・ピアソン教授（王立協会会員）

優生学——その定義、展望、目的

フランシス・ゴルトン

優生学とは、ある人種の生得的質の改良に影響するすべてのもの、およ
びこれによってその質を最高位にまで発展させることを扱う科学である。
ここで議論したいのは、ある一つの間人集団における生得的質や血統の改
良についてである。

改良とは何を意味しているのであろうか。優生学 (Eugenics) の *Eu* と
いう音節は英語の *good* と同義であるが、これは何を指しているのであろ
うか。さまざまな資質の良さと全体としての人^{キャラクター}格の良さとの間には、注
目すべき違いがある。人^{キャラクター}格はさまざまな質の均衡に大きく左右される
が、その均衡は教育によってかなりの影響を受けるものだ。それゆえに、
全体としての人格が良いか悪いかについての解決しようもない議論へとわ
れわれ自身が巻き込まれないために、可能な限り道徳を切り離して論じな
ければならない。その上、人^{キャラクター}格の良し悪しは絶対的なものではなく、現
時点での文明の状態によって相対的なものなのである。これが何を意味し
ているのか説明するには、寓話が適しているであろう。夜の静まり返った
動物園という場面を思い浮かべ、古い寓話のように動物たちが会話できる

状況を想像して欲しい。そして、すべての檻に容易に近づける、とても賢い生物——例えば、哲学的なスズメやネズミ——が、絶対的な道徳性の体系を打ち立てるといふ目的で、動物たちのすべての種の意見を集めようとしているところを想像して欲しい。捕食する獣とされる獣との間や、エサを得るために懸命に働かなければならない動物たちと、その動物たちに寄生し血を吸う動物たちとの間などに、理想の食い違いがあるということに多言は要さないであろう。母性愛には数多くの賛同が得られるであろうが、多くの魚類はそれを否認するであろうし、鳥達のさえずりは〔他の種の巣に卵を産み子育てさせる〕カッコウへの抵抗の音楽となって聞こえるであろう。このように何が絶対的な道徳かについては同意が得られない。しかし、優生学の本質は容易に定義できるであろう。病んでいるよりも健康的な方が良く、弱々しいよりも活発な方が良く、そして人生では自分の役割において適さないよりは適しているほうが良い、ということはずべての動物が賛同する点である。要するに、どのような種類の動物であったとしても、その悪い見本であるよりも良い見本であることの方が、より望ましいのである。それは人類においても同じことである。対立する理想や代わりとなる人^{キャラクター}格、また、相容れない文明は数多くある。しかし、そのような差異は人生に豊かさと興味深さを与えるものである。すべての人が、尊敬すべきマルクス・アウレリウス (Marcus Aurelius) やアダム・ベーダ (Adam Bede) のようであったら、社会はとても退屈なものとなるであろう。優生学の目的は、それぞれの階級や分派をその最良の見本によって代表させることである。まずそれを行った上で彼らに、それぞれのやり方で共通の文明を築き上げることを任せることなのである。

それぞれの階級における最良の見本を選び出すために、変人以外なら誰もが考えるような、かなりの項目数を含む質のリストが容易に作成できる。そのリストには、健康、活力、能力、男らしさや礼儀正しさが含まれるであろう。異なった種類の犬の間でもこれらのすべての点において、生

来の差異が明白に存在するのを思い起こして欲しいが、人間も他の動物種と同様、生来可變的な性質を持っているのである。特別な適性は、同じ適性を持つものによって高く評価されるであろう。例えば、芸術的才能は芸術家に、恐れずに立ち向かう探究心と誠実さは科学者に、宗教的没頭は神秘主義者によって評価される。自己犠牲を厭わぬ者、自らに苦行を課する者、その他の例外的な理想主義者もいるであろう。しかし、こういった人々の代表者は、彼らを選んだ人々よりも、共同体のより良き成員であると考えられる。彼らは、ある国家で必要とされている資質——より多くの活力やより高い能力、そして目的の高度な一貫性——を有していることであろう。また、共同体は犯罪者や望ましくないと評価される人々の代表者を自ずと拒否するものと考えられるであろう。

ここで、優生学の実践が今後、われわれの国民の平均的な質を、現在の国民の中でのより良い部分〔の水準〕にまで高めると想定して、その結果何が得られるかを考えてみよう。家庭、社会、そして政治的な生活の一般的な状態〔の質〕は高まるであろう。全体としての人種は、愚かさや、軽薄さ、興奮しやすさが減り、政治的には現在よりも慎重になるであろう。よって「大衆受けを狙う」デマゴグは、今日よりもより思慮深い観衆を相手に演じなければならなくなる。さらにわれわれは、英帝国のもつ果てしない可能性を実現させるのにより適した者となるであろう。最後に、現時点では希にしか見られない高い能力をもった人々は、より頻繁に見られるようになるであろう。なぜならば、彼らが属する群の水準自体が向上するからである。

優生学の目的は、道理にかなう範囲で (reasonably) 用いることのできる最大限の影響力を行使することによって、共同体にとって有用な階級が、〔現在、人口に占めている〕割合以上に、次の世代〔の人口〕へと寄与できるようにすることである。

本社会学会のように、学問的で活動的な学会が進むべき道は、以下のよ

うなものであろう。

1. 遺伝の諸法則に関する既存の知識の普及と、さらなる研究の促進。遺伝に関して、保険経理統計といわれる側面の知識が、近年どれほど進んだかについては、ほとんどの人が気づいていない。現在では、各親等における平均的な類似性を定義し、出生率や死亡率のように統計が問題となる他の事項と同様、数学的に扱うことができるのだ。
2. さまざまな社会の階級（市民にとっての有用性によって分類されたもの）が、古代や近代国家において、歴史の異なる時点で人口にどれほど寄与していたのか、その比率についての歴史的調査。国家の盛衰がこの〔各階級の比率の〕影響を受けていたことを確信させる強力な理由がある。例えば、高度な文明においては、上流階級の多産を抑制する傾向にあったようだ。その理由は多数あり、その中には既知のものもあれば、推測の域をでないもの、曖昧なものもある。下層の階級に関しては、動物園で野生動物の多くの種で多産が禁じられていることと類似した点が見られる。飼い慣らされた数多くの種には、自由が制限され生存への闘争を止めさせられたときに、多産であるものはほとんどない。それでも多産であり、かつ人間にとって有用である動物が、家畜化されてきたのである。この不明瞭な行動と、未開人種の大部分が高度な文明に出会ったときに絶滅してしまうこととの間には——ほかにも周知の、付随する理由があるにしても——おそらく何らかの関連があるであろう。しかし、野蛮な (barbarous) 人種の大部分が絶滅する一方で、黒人などのいくつかの人種は存続し続けている。よって、生殖能力を損ねずに高度に文明化できるような人種の類型が存在すると考えていいであろう。否、それどころか、多くの家畜化された動物と同じく、このような人種類型は、人工的な条件下でさらに多産になるとも考えられる。
3. 繁栄している大家系が、どのような状況によって最も頻繁に生み出さ

れるのかに関する事実の体系的収集。いうなれば、優生学を可能にする条件に関する研究。イングランドにおいて繁栄している家系の名や、彼らがどのような条件の下で生じてきたのかについては未だ知られていない。たとえ困難でも、現在確かめることのできる事実を慎重に研究することなしには、優生学という科学のさらなる進展を望むことはできないであろう。繁栄している家系というのは、とりあえず一応の標準に達していると考えられる定義を用いるなら、その家族の子息が、彼らの幼少期の同級生に比べて、明らかに優越した地位を得ているということである。「大きな」家系であると考えていいのは、成人した男子が3人以上いることである。優生学を真剣にとらえている多くの会員を擁する学会にとっては、統計の研究者が利用できるよう、このような記録の一大収集を開始し保持することも、それほど負担にはならないであろう。その課題を請け負った委員会は、参加を呼びかける文面とその〔調査票の〕配送を任せられる人物を非常に注意深く検討せねばならない。その文面は簡潔で、できるだけ短いものであり、正直に答えられ、かつ調査にとって重要であるような質問で一貫しているべきである。少なくとも最初の段階では、調査票を依頼した家族の誰もが容易に、また躊躇うことなく答えられる程度の質問にとどめておくべきであろう。確かめるべき重要な点は、結婚した時点での両親双方の身分(status)である。もし、われわれが今なら獲得できるであろう広い知識を、その〔結婚の〕時点で入手できていたとするならば、そこから優生学的な形質^{キャラクター}について、何らかの予想がつけられたかもしれないのである。その根拠として必要とされるのは、彼らの人種、職業、居住地と、それぞれの家柄であり、そして兄弟姉妹についての情報である。最終的に要求されるのは、なぜ子息たちが「繁栄する」家系と呼ばれるに値するのか、そしてなぜ価値のある成功例として〔他から〕区別されるに値するのか、ということの理由で

ある。この草稿の集積は、繁栄する家系についての「指南書 (golden book)」へと将来展開するであろう。中国人の慣習は、しばしば非常に良識のあるものであるが、彼らは過去に遡って名誉を与えるということを行う。われわれも彼らに学んで、注目に値すべき子息を持つ親に敬意を表するべきかもしれない。国民の富を増大させる、この貴重な財産で貢献してくれる者として、両親は尊敬されるに値する。また、繁栄する家系の記録を体系的に収集するという行為は、一般の人々に、優生学が精力的な〔社会〕学会によって、重要な科学研究の対象となっているという事実を、知らしめるというさらなる利点をも有しているのである。

4. 結婚に作用する諸影響〔の研究〕。〔フランシス・〕ベーコン卿の、死についての小論をここで引用するのが適切であろう。彼は、死の恐怖を最小化することに関して次のように述べている。

人間の心の中にあるどんな情念も死の恐怖を負かして支配できないほど弱くはない。(中略) 復讐の念は死に打ち勝つ。愛は死を軽んずる。名誉はそれを願う。悲しみはそれに逃げこむ。恐怖はそれを先取りする。

〔渡辺義雄訳『ベーコン随想集』岩波文庫、岩波書店、1983年、21頁〕

結婚についても全く同様の考えが適用できるであろう。愛の情熱はあまりに抗し難いので、その針路を方向づけようとするのは愚かなことだと考えられている。しかし事実を検討すると、この見解が誤りであることは明らかである。あらゆる種類の社会的諸影響が最後には大きな力を持つのであり、これら諸影響は多岐にわたる。もし優生学的な見地から不適格な結婚が社会的に禁止されるなら、もしくは人々が、一部の人がいとこ婚に対して抱いているような非合理的な嫌悪感をもって見なすようになれば、そのような結婚はほとんどなされなくなるだろう。実際、非文明人の間で確認されている数多くの結婚規制について記述しようとするれば、膨大な量〔の

資料] となるのである。

5. 優生学の国家的重要性について説き続けること。それには三つの段階がある。第一の段階として、優生学が学術的な問題として理解され、その重要性が認識され純然たる事実として受容されねばならない〔科学としての優生学〕。第二に、優生学の実践的な展開は、真剣に考慮されるべき対象であると認識されねばならない〔実践としての優生学〕。そして第三の段階として、新しい宗教のように、国民の意識に取り込まれなければならない〔国民意識としての優生学〕。実際、優生学は今後、正統な宗教的教義となるに値するものである。なぜなら、優生学は、人類が最も〔環境に〕適応した人種によって代表されるよう保障することによって、自然の営為と共働するものだからである。自然が無分別に、時間をかけ、そして無慈悲に行っていることを、人間は将来に備え、迅速に、思いやりをもって実行できるかもしれないのだ。これは人間の力の及ぶ範囲であるのだから、その方向へと努力することはわれわれの義務となろう。それはちょうど、不幸に遭った隣人に援助することが人の義務であることと同じである。血統の改良は、われわれが合理的に着手できる最も重要な目的のひとつであると、私には思われる。われわれは人類の最終的な運命を知らない。けれども、ここまで述べてきた意味において人類の水準を高めることが、立派な仕事であることは確かであろう。なぜなら、水準を低下させることは恥ずべきことだからなのだ。私は、優生学が人類にとっての宗教的なドグマになることが不可能だとは全く考えていない。けれども、そのためにはまず、優生学の詳細を、周到な研究によって解明せねばならないであろう。熱心さのあまり性急な行動をすると、近い将来に黄金時代を迎えるという期待を抱かせてしまいかねない。しかしそれは確実に誤りであることが明らかになるため、科学〔としての優生学〕の信用を貶めるという害を招いてしまうのである。

何よりも重要なのは、優生学が有望で最も重要な研究として、広く一般の知識人の承認を得ることなのである。その上で、優生学の原理を国民の心に浸透させていけばいいであろう。そうすれば国民は、われわれが完全には予見できない方法で、徐々に実践的な影響を〔優生学の〕諸原理に与えてゆくであろう。

(北中淳子・皆吉淳平訳)